

第31回('21)書学書道史学会大会

今年度の大会は、10月31日(日)にZoomによるオンライン配信で開催いたします。詳細が決まりましたので、ご案内申し上げます。

事前の参加申込、参加費は不要です。ご参加にあたっては、下記のガイドライン・注意事項を必ずご一読ください。多数のご参加をお待ちしております。

***大会当日の参加方法につきましては、同封の別紙裏面をご覧ください。事前のご確認をお願いいたします。**

10月31日(日) 研究発表(オンライン配信)【司会: 萱のり子】

10:15 ~ Zoom 入室開始

① 10:30 ~ 11:00 「陝西型鎮墓瓶と東牌楼後漢簡牘の書法に関する一考察—両者の比較と再現実験の試み—」

井田明宏(安田女子大学)

② 11:00 ~ 11:30 「女手成立過渡期の仮名の書道史上の位置付け」

中山陽介(國學院大學大学院生)

③ 11:30 ~ 12:00 「『麒麟抄』の成立と伝来について」

加藤詩乃(国文学研究資料館)

12:00 ~ 13:00 休憩

④ 13:00 ~ 13:30 「観鷺会の活動とその実態」

前川知里(大東文化大学大学院生)

⑤ 13:30 ~ 14:00 「河井荃廬の篆刻における中国古典の受容と昇華について—一倣古期を中心に—」

権田瞬一(大東文化大学)

⑥ 14:00 ~ 14:30 「内藤湖南の王羲之書法研究について—関西大学内藤文庫関係資料の紹介を兼ねて—」

石 永峰(関西大学)

大会実施に関するガイドラインおよび注意事項

この度の大会開催、実施にあたりガイドラインを定めました。参加者各位におかれましては、以下に掲げました全ての事項をお読みいただき、ご理解の上、遵守願います。

- ・本大会は、CV-19対策を考慮し、臨時にてオンライン(Zoom利用)による配信の形式を採用しました。ただし社会環境の著しい変容や緊急性を要する事態が発生した場合には、参加者への事前連絡なく大会を中止する場合があります。
- ・本大会の開催にあたっては、当学会理事会決議の下、国内局+事務局が、開催準備から実施にいたる一切の業務を行います。
- ・本大会の内容は、2021年度書学書道史学会の正規会員のみに対して配信するものであり、各会員は学会の許諾なく、会員以外の者へパスワード、Zoom参加URL・ミーティングID・パスコードを供与することを禁じます。また本大会参加者に向けて配信、公開された映像や音声データ、資料等一切の複製、録画、録音も禁じます。
- ・本大会において開示する学術内容の一切は、各発表者の許諾なく、本大会参加者ならびに当学会員が他者へ供与したり、SNS等を用いて公示するなどの行為を固く禁じます。その他においても、本大会参加者ならびに当学会員は、学術研究におけるリテラシーを深く理解し、その意とするところに鑑み、違反する行為の一切について厳に慎み、この事項内容を遵守してください。
- ・本大会における研究発表者は6名。事前に配布された大会開催の要項に則り、司会者が進行の一切を務めることとします。各発表時間は20分以内、質疑応答の時間は10分を上限とします。各発表の日程は、開催要項の掲示に準じます。
- ・各発表中は、発表者ならびに受信者とも、司会者および運営方の指示に従っていただきます。まず受信者においては、その視聴時、各自が使用する受信機器の音声機能を切断することを義務づけます。また各発表後に設けられる質疑応答の時間においては、司会役より質疑応答が許された受信者のみ、許可された範囲内で音声機能を使用できるものといたします。
- ・本大会の配信準備にあたっては、可能な限り十全なる配信設備の整備にあたりましたが、各受信機器のおかれた通信環境や状態に応じて、当日中の受配信状況が左右されるなど、不具合の発生が予測されます。したがって参加者各位には、事前にこれらの点を十分ご理解いただくとともに、事前に共有、了承された事項として扱わせていただきます。なお、これらに関する問い合わせや質問等については一切応じられませんので、ご了承ください。

以上

① 陝西型鎮墓瓶と東牌楼後漢簡牘の書法に関する一考察

— 両者の比較と再現実験の試み —

井田 明宏

後漢時代の墳墓に副葬された鎮墓瓶は、主な出土地である河南省洛陽と陝西省西安の間で、各々が異なる特徴を有することから「河南型鎮墓瓶」「陝西型鎮墓瓶」(以下、河南型、陝西型)と区別されている。発表者は、この二つの型の書法について、使用する書体の差異を見出し、河南型には八分、陝西型には通行書体が見られる点を明らかにした。それを踏まえ、本発表では特に陝西型の書法に注目したい。

陝西型と同時期の肉筆資料である東牌楼後漢簡牘中の書信簡(以下、東牌楼書信簡)の間には、書写材料や書写内容など多くの点で差異が認められるが、点画の形状など書法的特徴には共通点が見いだせる。この両者の共通性は何を示しているのだろうか。本発表は陝西型と東牌楼書信簡の書法を比較し、その書法的特質を探るとともに、特に陝西型の書法がいかなる書写意識の下で書写されたかについて実験を交えて考察し、後漢時代後期の通行書体の実態の一端を明らかにすることを目的とするものである。

陝西型と東牌楼書信簡は書写材料に差異がある。東牌楼書信簡に使用される簡牘は平面であるのに対し、陝西型の書写面は曲面であり、肩口から下部にかけて径の長さが減少する形状でもある。また、その鎮墓瓶への書写には漆を使用したとされる。このように大きく異なる書写材料であるにも関わらず、双方の書法が共通性を有することは、非日常的な書写材料である陝西型への書写において、特に工夫が求められたことが想定される。

さらに、先行研究では東牌楼書信簡を行書系と区分しているが、同一簡中に草書が混入するなど、筆者の曖昧な書体認識が指摘できる。それに対し、陝西型には草書の混入がほとんど見られない。

これらのことから、陝西型の筆者は、通行書体のある種の典型として認識し、それを遵守しようとする規範意識の下で書写を行っていたと考えられる。陝西型の書法は、通行書体における新たな典型の発生を示唆するとともに、後世の行書の素地を成すものといえるだろう。

(安田女子大学)

② 女手成立過渡期の仮名の書道史上の位置付け

中山 陽介

万葉仮名を書き崩していつて成立したとされる女手(平仮名)に対して、万葉仮名と女手の中間的な仮名を普通「草仮名」と呼んでいる。しかし、女手の成立した十世紀以降に書かれた「秋萩帖」などの例と、女手成立以前とされる九世紀の「讃岐国司解端書(有年申文)」などの過渡期の仮名とは、ともに「草仮名」と呼ばれていても、仮名の歴史上の位置付けが異なることが従来論じられている。十世紀以降の「草仮名」は、意図的に草書などを取り入れた装飾的な仮名の書体で、歴史上、女手の前身には位置しないことが知られている(築島裕一九八一、矢田勉二〇一二など)。

一方で、九世紀の過渡期の「草仮名」は、女手の前身と考えられてはいるが、それと女手や十世紀以降の「草仮名」との歴史的な関係性については現在議論の途上にある。九世紀の過渡期の「草仮名」が保存・継承されて女手の時代に使われたのが十世紀以降の「草仮名」であるとする見方も従来あり(小松茂美一九六八)、また近年では、九世紀後半の仮名の中に万葉仮名の字形や草仮名の字形とともに女手の字形が見出だされることを指摘して、この時期には「草仮名」と女手が同時並行的に展開していたとする見解も見られる(池田和臣二〇一四、森岡隆二〇一九)。

しかし、こうした見方は実物の資料の分析によって詳しく証明されているわけではなく、そのような渾沌の状態からどのように十世紀以降の体系立った仮名の書法が確立しえたのか疑問が残る。

発表者はこれまで過渡期の仮名資料の文字形態を分析することで女手の成立過程を考察してきたが、九世紀の過渡期の仮名が十世紀の「草仮名」とどのような関係を持つかについては、十分に論じ尽くせていなかった。

そこで本発表では、仮名書法の淵源と目される九世紀の過渡期の仮名について、女手との連続性にも注目しながら十世紀の「草仮名」との書法的な比較を行なうことで、これが十世紀の仮名の体系とどのような関係性を有し、書道史上にどう位置付けられるかを明らかにする。

(國學院大学大学院生)

③ 『麒麟抄』の成立と伝来について

加藤 詩乃

『麒麟抄』は南北朝時代に成立したと考えられている書論書である。本書は空海や兼明親王、藤原行成による著作と仮託して伝わり、さらに「密教的色彩が濃厚」(『群書解題』巻八、「麒麟抄」解題より)という特徴から、書論書のなかでも特異な存在としてみられてきた。そのため、これまであまり見返されることがなく、未だ基礎的な研究についても不十分なままとなっている。本発表は、『麒麟抄』の諸本の系統を分析し、その成立や伝来の経緯を明らかにすることを目的とする。

本書は、『続群書類従』第三十一輯下(雑部六十三、巻九一三)と『日本書画苑』第一(国書刊行会、一九一四年)にそれぞれ系統の異なる伝本が活字化されているが、元となった底本については記されておらず、どちらの系統にも属さない写本も確認されている。まずは、現存する『麒麟抄』の写本、版本の情報を整理し、諸本の系統付けを試みる。そのうえで、『麒麟抄』の本文と共通する項目を含む他の書論書の内容と照らし合わせ、現状から把握できる範囲において、本書の成立過程に迫っていききたい。

『麒麟抄』に含有される思想を分析すると、密教的というよりはむしろ中世日本紀の思想を中心として、さまざまな信仰が看取される。それらは必ずしも何か特定の思想に則っているのではなく、当時の人々の民間信仰の延長上におけるものとみられる。おそらく、伝来の過程で、特に天台系修験や禅宗の思想が加わったことよって、尚更、宗教的な着色が色濃く表れているものと想定される。

本書をはじめ、十五世紀半ば〜十六世紀はさまざまな秘伝書が乱立する時代であるが、殊に書芸の世界において、そこには世尊寺流から持明院流への伝承が複雑に交錯した状況が密接に関わっている。当時、両家と近い存在にあった人々の動向を探り、『麒麟抄』のような大部の秘伝書がまとまった形で伝わった経緯、また、その後版本として刊行され、大師流のコミュニティで重用された要因を紐解いていきたい。

(国文学研究資料館)

④ 観鷺会の活動とその実態

前川 知里

観鷺会は、明治四十年に大阪で発足した書道団体である。観鷺会については近藤高史が『明治書道史夜話』(芸術新聞社、平成三年)において言及しているものの、その概要を詳述しているものはない。

明治四十年代、東京では日本書道会をはじめ、談書会や法書会、健筆会などさまざまな書道団体が結成されるが、これらと同時期に大阪では観鷺会が結成された。観鷺会は当時大阪で展覧会や煎茶会の会場として人々に使用されていた大阪博物館を会場として定期的な展覧会開催を行っている。明治期の大阪では、観鷺会結成以前にも大阪博物館、その他の会場において書画会や煎茶会が多数開催されている。中には明治三十五年に結成された保古会のように、古典籍や古書画の展覧会を定期的に行っている団体や、昌隆社のように煎茶会を頻繁に開催している団体が存在するものの、いわゆる書道団体として定期的に書の公募展覧会を開催している団体は観鷺会以前には確認できない。一方で、明治二十五年から東京上野公園内の展覧会場で開催されていた、大日本選書奨励会主催の選書展覧会などの東京の書道展には、寺西易堂をはじめとして大阪の書家の出品を確認することができ、このように、観鷺会結成以前から大阪の書家の活躍は確認できるものの、それ以前に大阪において近代的な書道団体が結成されていた形跡は管見では見当たっていない。

したがって本発表では観鷺会に注目する。観鷺会の幹事を務めていた藤澤南岳の日記や当時の新聞記事、雑誌記事などから観鷺会の活動と実態を明らかにし、その背景について私見を述べることとした。

(大東文化大学大学院生)

⑤河井荃廬の篆刻における中国古典の受容と昇華について

— 倣古期を中心に —

権田 瞬一

河井荃廬(一八七〇—一九四五)は深い見識と鋭い先見性をもって中国璽印および清朝名家の篆刻技法に基づき渾厚高古な作風を樹立したとされる。荃廬の登場は日本の印壇に新風を吹き込み、後の印人の進むべき指針の一つを示した。

荃廬の追究した古典は先学によれば、まず篠田芥津に師事し浙派の技法を習得し、次に印譜を介して徐三庚や趙之謙の作風を摂取、三十歳で呉昌碩に面会する数年前からは呉翁の刻風に傾倒するという。これまでの荃廬の篆刻研究は、こうした刻風の変遷において、何を学んだかが考察の中心であった。

本発表では、荃廬の刻風の変遷において鄧派の印人および漢印の刻風の受容が集中的に指摘される二十五歳から三十七歳まで(便宜的に倣古期と称する)の作品に焦点を当て、古典を参酌しながらも、それをいかに昇華し、荃廬の独自性がどのように形成されていったか、という問題を扱う。

発表者は、習う古典に左右されない荃廬の根本的資質として、明るく清澄な作風を指摘できると考える。この明るさは、浙派風はより切刀法が抑制され、徐三庚風はより円転が増し、趙之謙風では趙ほど空間を締め過ぎず、呉昌碩風はより空間を整え、線と線を意識的に接触させ、つぶしの効果で荃廬らしさが現出しているように思われる。

以上のような荃廬の刻印について荃廬が刻印制作の際に学んだと思われる特定の印人(古典)の特定の刻印を指摘し、それとの類似点と相違点を明らかにし、荃廬独自の篆刻表現を導いていく。

なお、荃廬には数は少ないが、印学に対する発言が残されている。例えば篠田芥津や当時の浙派から影響を受けた自作に対しては「真直」と批判し「抜け出るには、長い間可成り苦労した」と述べ、徐三庚や趙之謙の風を摂り入れ、呉昌碩の作品を見せられて「一寸想像もされない面白い刻風」と魅力を感じている。このような言説からも荃廬の表現に関する示唆を得たい。

(大東文化大学)

⑥内藤湖南の王羲之書法研究について

— 関西大学内藤文庫関係資料の紹介を兼ねて —

石 永峰

内藤湖南(一八六六—一九三四)は近代日本における京都学派支那学の創始者の一人、東洋史学の開拓者として知られる。彼は新聞記者から東洋史学者になり、史学方面の業績に埋められたせいか、湖南の書法及び書論は世の中に忘れられがちであった。一九一三年に内藤湖南等二十八名の主唱によって開催された大正癸丑京都蘭亭会は、当時の北京、上海、杭州、東京の蘭亭会とお互いに呼応して成功を収めた。京都蘭亭会は当時日本の文人墨客が中国文化を吸収し、王羲之を記念する翰墨の雅会であるだけでなく、近代日本の王羲之研究においても大きな歴史的意義があると言える。主唱者の一人である内藤湖南は、実質上の主導者でもある。彼は中国文化史研究における優れた実績に基づき、王羲之及びその流派を書法の正統と見なし、京都蘭亭会の前後に王羲之の法帖に関する題跋などを多く書いており、本研究にとって貴重な研究資料となる。

博文堂から出版した「景印唐拓十七帖跋」の中で、湖南は「甘為右軍僕役」という立場を世に表明した。それは湖南が決して意地を張って一時に言っただけでなく、王羲之の書法を尊敬するとともに、王羲之の研究を長年にわたって続けてきた決断である。そして、その姿勢は湖南が晩年に至るまで保持して変わることにはなかった。

それでは湖南は王羲之の真相を見極めるために、どのような研究方法を用いて、どのような研究の軌跡を辿ってきたのか。本研究は、このような問題意識のもとで、関西大学内藤文庫関係資料を利用しながら、湖南の書いた王羲之法帖の題跋を整理し、それに関連する研究を通して、湖南が自分なりの王羲之研究体系を構築した業績とその影響について考察する。

(関西大学)